

第一六回南のシナリオ大賞応募作品

不惑

登場人物

佐野真治 (40)

佐野美春 (75)

所木涼 (19)

「不惑」のあらすじ

真治は、余命三カ月を宣告された母親の美春から命令され、美春が生まれ育った町、福岡の久留米市に行く。目的は、最後に一目、初恋の男性・涼介と話したいという美春の願いだっただけ。

真治は、美春が本当に余命宣告されて死んでしまうのか怪しんでいた。それほど、ホスピスにいる美春は元気だったのである。

久留米に着き、駅前のロータリーをスマホで見せてやると「懐かしい」と喜ぶ美春。夕方には涼介の経営する居酒屋に着くが、2年前に涼介は他界しており、孫の涼が経営していた。真治は美春に事情を説明するも、「まるで50年前の涼介を見ているようだ」と涼を見て大興奮。久留米弁で少しだけ涼と話しただけで、美春は電話を自ら切ってしまう。そして真治は、初対面の涼に、四十路（不惑）になったにも関わらず、母を失うことへの恐怖を吐露するのであった。

飛行機が着陸する音。

空港内の音（アナウンスや雑踏）

LINE電話が鳴る音。

真治「何だよ母ちゃん」

美春の声（以下、美春）「着いた？福岡空港」

真治「着いたよ」

美春「そんなイラつかないでよお。母ちゃん

余命3カ月」

真治「いや、ほんとなのか。それ」

美春「ちゃんと入院してるだろ。ホスピス」

真治「仮病かってくらい元気じゃねえか」

美春「それは母ちゃんも謎。でもステージ4」

真治「で、もし例の人がいなかったらどうし

てくれたんだよ」

美春「またその話？」

真治「東京から来て、いなくなったら無駄骨も

良いところだよ」

美春「母ちゃん余命3カ月」

真治「しつこいよ」

美春「いなかったら、店の外だけでもいいからカメラで撮ってきてよ」

真治「グーグルマップで観なさいよ」

美春「冥途の土産だと思ってさ」

真治「あと100年は生きるだろ」

美春「ね。突然の宣告に驚いています。人間ドッグなんか行かなくや良かった」

真治「とりあえず行くよ。行けばいいんだろ」

美春「最初から黙って行け」

真治「なんなんだよ。ムカつくなあ」

LINE電話を切る音。

真治「あ、電話切りやがった。とりあえずバスで久留米まで行くか」

バスの行きかう音。

LINE電話の鳴る音。

美春「久留米着いた？」

真治「エスパ―か」

美春「西鉄駅の音だ。なつかしい」

真治「ビデオに変えようか」

美春「そうしてそうして」

スマホを操作する音。

真治「ほら」

美春「うわぁ。タイムスリップしたみたい」

真治「確かに、何も変わらん」

美春「アンタ、最後来たのおじいちゃん死ん

だ時よ」

真治「15年前か」

美春「アンタも、もう40歳だもんね今年。

不惑だ」

真治「毎日、迷ってばかりだよ」

美春「母ちゃんの年になってごらん」

真治「もう迷わん？」

美春「迷いが増す」

真治「さつきググったんだけど、どうやら、

今日は例の店、営業してるらしい」

美春「なんで事前に調べた？」

真治「当たり前だろ。それくらい」

美春「それは旅とは呼べんだろうが」

真治「ちよつとはこっちの身になれよ」

美春「カメラ下ろすな」

真治「ああ」

バスの停車する音。

雑踏。

真治「もういいだろ。腕が疲れた」

美春「もうちよつと。アンタ、そんなんだからずっと独身なんだ」

真治「自分が元気になったら、またくればいいじゃないかよ」

美春「そんな日は来ないんだっての」

真治「余命宣告されたなら、もうちよつと元気なくなんだろ」

美春「だからあ。それは自分でも謎なんだっ

ての」

真治（M）「それから俺は、ご先祖様のお墓参りやら、町の写真を撮ったりして、店の営業がはじまる夕方を待った」

飲み屋の引き戸を開ける音。

涼「いらっしやい。お一人ですか？」

真治「あのお、すいません。カメラ回してもいいですか？」

涼「え？テレビの人？」

真治「いえいえ違うんです。ここ、所木さんのお店ですよ」

涼「ええ。自分が所木ですが」

真治「えーと息子さん。いや、若いな。お孫さん？」

涼「言ってることわかんないです」

真治「えーとですね、なんかすげえ恥ずかしいんですけど、母ちゃんが、あ、俺のね、母ちゃんが余命3ヶ月で」

涼「それは大変だ」

真治「いや、ポイントそこじゃなくってね」

涼「でも余命3ヶ月でしょ」

真治「つまり、つまりその母ちゃんがね、あなたのお父さんなのかお爺さんなのかわからんけど、初恋の人なんだって。あー、やっと全部言えたよ」

涼「えーと、そのお母様は」

真治「あ。東京です」

涼「じゃあどうやって会うんです？」

真治「あ、これ。スマホ」

涼「なるほど。と言うか、ここまでがゴールでしょ」

真治「あ、そうか」

涼「中にどうぞ。ただ、じいちゃんは死にました。2年前。あ、俺、孫の涼です」

真治「あ、すいません。私、佐野です。息子の真治。母親は美春です。てか、知りませんよね」

涼「ええ。じいちゃんからは特に」

真治「涼さん、若そうだなあ。おいくつ？」

涼「19です」

真治「それで社長か。すごいな」

涼「何言ってるんですか。小さな店ですよ」

真治「いや、すごいですよ。すごい」

涼「敬語やめてください」

真治「こっちはだだのサラリーマンだよ。同期が出世する中、俺だけ係長代理のまま」

涼「はあ」

真治「あ、それより母ちゃんだ。で、いいですか？カメラ。それから申し訳ないんですけど、わめき出したらフオローお願いします」

涼「わめき出すって、そんな方なんですか」

真治「ええ。まあ」

LINE電話の音。

真治「あ、母ちゃん？店の中、ちゃんと映ってる？」

美春「あ、なつかし。うわ、なつかしい」

真治「で、この方」

涼「どうも」

美春「え？え、え、ええええええええ」

真治「な、なんだよ。そのリアクション」

美春「人魚の肉でも食べた？」

涼「は？」

美春「だって50年前のままだから涼介さん」

真治「あほか。この方は涼さん。お孫さん」

涼「どうも、涼です」

真治「涼介さんは亡くなったの。母ちゃん聞

いてる？母ちゃん？」

美春「すごい。感動」

真治「はい？」

美春「だってさ、あの頃に戻ったみたいなん

だもん」

真治「何言ってるんだよ。アホか」

美春「喋んな。息子」

真治「はあ？」

美春「雰囲気壊れる。それからカメラ。手ぶ
れ」

真治「なんだよ」

美春「涼介さん。元気にしよつとね」

涼「あ、えーと、しよるよ。あなたは」

美春「あなたって。春ちゃんやろ」

涼「そやったね。春ちゃん」

美春「恥ずかしか。こっちはしわくちややけん。涼介さんは綺麗なままよ」

涼「春ちゃんも変わらん」

美春「そうね？そう？」

涼「そうや」

美春「昔から、涼介さんは口が上手いけん」

涼「そげなこつなか」

美春「最後に会えてよかった。ありがとう」

LINE電話の切れる音。

真治「あれ、母ちゃん？」

涼「電話、切れてます」

真治「やべ。電池切れか。いや、違うな」

涼「ご自分で切られたんじゃないかな」

真治「え？なんだよ。マジかよ。いや、福岡
まで来てさ、30秒くらいしか話さないわ
け？マジか。さすがに予想の斜め上だわ」

涼「ふふ」

真治「いや、ありえんでしょ。俺、有給まで
とってきたのにさ。え？なんで笑ってるの」

涼「いや、良い息子さんだなと思って」

真治「いつも良いように使われちまってさ。

俺が独身なのも出世できんのも、きつと母

ちゃんのせいだよ」

涼「羨ましいです」

真治「どうして？最悪よ」

涼「俺は、じいちゃんに育てられたんで」

真治「え？親は？」

涼「親は、俺を置いて家を出ました。親父に
女ができて。続けておふくろにも」

真治「そうなんだ」

涼「じいちゃんのおかげです。ここまで生き
てこれたのは」

真治「じいちゃんが死んだ時、どうだった？

すまん。なんか変なこと聞いて」

涼「悲しかったです。ただただ、悲しかった」

ラジオから流れる音楽。

真治「俺さ、震えが止まらなくなんだよ。ほら見てよ。ほら。今もさ。母ちゃんが、もし、ほんとに死んじゃったらって考えたら、いつも、こうなっちゃうんだ」

涼「佐野さん」

真治「な、笑うだろ。俺、40だぜ。母ちゃんは75だ。いつ死んだっておかしくない。でもさ、怖いんだ。母ちゃんのいない未来考えるだけでさ。俺」

涼「何もおかしくないですよ」

真治「いや、会社の同期でさ、何人も親死んでるヤツいるんだ。みんな、普通だよ。普通に会社来るし、葬式でも、普通だよ」

涼「そう見せてるだけですって」

真治「俺には、それができそうにないんだ。」

会社の中で、仕事してる時とかでもさ、いきなり泣いちまいそうでき、怖いんだよ」

涼「いいじゃないですか」

真治「よくないだろ。周りになんて言われるか。またバカにされるよ」

涼「周りは関係ないでしょう」

真治「君みたいなヤツは、俺の周りにはいないだよ。みんな、誰かの失敗ばかり探してやがんだ」

涼「俺には、その権利さえないんです。自分の母親がいつ、どこで死んだかもわからななんです」

真治「そうだよな。すまん。俺、マジで弱いな。よく周りから甘えんなって怒られるんだ」

涼「いや、違うんです。違う。俺が言いたかったのは」

真治「歳上らしいところ、一個も見せてないな。

俺と涼くん、父親と息子でもおかしくない歳の差だぜ」

涼「佐野さん。すいません生意気言っつて。俺、会社で働いたことないから、わかんないんです。そういう感じが」

真治「君は優しいな。優しいよ」

涼「いや、そういうんじゃない」

真治「不惑なんだと」

涼「不惑？」

真治「もう何も迷わない。40歳のことをそう言うんだ」

涼「なんかそれって、そうあってほしいだけなんじゃないんですか？」

真治「誰が」

涼「わかりませんが、その言葉決めた人。なんか、役所に頼まれて、えらい学者が決めた言葉みたいじゃないですか」

真治「なるほど。考えたこともなかったな」

涼「世間一般の40歳の男には、こうあってほしいみたいな」

真治「確かに、みんな俺じゃ社会が回らん」

涼「でも、全員が惑わないのは違いますよ」

真治「俺は、落伍者なんだよ。それは自分でもわかってる」

涼「それと、お母さんのことは別ですよ」

真治「分けられないよ。切り替えができないから、段取りよく仕事ができないんだと上司からもいつも言われてる」

涼「今は、そのこと忘れてください。あ、ちなみに東京には今晚お帰りになりますか？」

真治「いや、駅前の東急イン取ってる。いや、つまり、明日帰るんだ」

涼「ははは」

真治「いやあすまん。上司からも余計な情報が多いっていつも言われた」

涼「自慢のエツ、食ってってくださいよ」

真治「おお。てか何それ」

涼「イワシの一種です」

真治「じゃあイワシでよくない？」

涼「とりあえず作りますわ」

真治「あ、俺。魚食えない」

涼「は？じゃあ普通に焼き鳥とかで」

真治「あ、それで」

料理をする音。

真治（M）「初めて来たはずなのに、なんだか懐かしい感覚になった」

涼「さ、できましたよ。どうぞ」

お皿をテーブルに置く音。

真治「おお。美味そうだな。いや、美味しいよ。

美味しい。地鶏？」

涼「鳥栖です」

真治「鳥栖か。鳥栖」

涼「はい。鳥栖」

真治「鳥栖。鳥栖ね（泣き出す）」

涼「今日は、とことん吞んで食ってください」

真治「ありがとう。ほんとに。ありがとうね」

ラジオから流れる音楽。